芸人 友近さん

日本の女性芸人を代表する存在でありながら，歌手や女優としても活躍する友近さん。今や彼女を知らない国民はいないのではないだろうか。多忙な毎日を送る彼女の原動力は何なのか。所属事務所とのエージェント契約締結やコロナ禍での仕事の変化，業界内で少数である女性としての働き方についてもお聞きした。インタビュー時間でさえも彼女はそこをステージにしてしまう。笑いと熱い思いに圧倒された時間であった。

聞き手・構成：菅原 草子，小峯 健介

── 芸人を目指されたのは，テレビで漫才を見て自分も面白いことをしたいと思ったからだとか。

幼いころからよく家で姉とミニコントをやっていたんですが，テレビで漫才しておもしろい物まねしている人に，愛媛の田舎で私も同じようなことを思っているんですよって，存在を知ってもらいたいと思うようになりました。思っているだけではちょっとわかった風な子で終わっちゃうし，口では誰だって言えるから，それを証明するにはその世界に入るしかない，と芸人になりました。今のスタイルは昔のミニコントの延長ですね。

── 実は始まりは歌の大会とお聞きしました。

昔から父親が行くスナックとかで歌って，周囲から歌が上手いと言ってもらってたので，一度カラオケ大会に飛び入り参加したら賞をもらって。そこから自分でもカラオケ大会に出場してました。ただ歌うのは好きだったんですけど，ずっとおもろいことがしたいというのは根底にあって。将来はやっぱりお笑い，と思っていました。

── その後地元のテレビ番組に出演されていたんですよね。

愛媛のローカル番組がスタートするときに，一般のリポーターを募集するオーディションを受けて特技で歌を歌ったんです。そうしたら，長崎歌謡祭という年1回の歌謡祭に出ませんかと。歌で声を掛けてもらって，そこからリポーターになりました。結局19歳から26歳まで，大学卒業後に道後の温泉旅館で仲居さんをしながらリポーターを続けたんですが，私は有名になりたいわけじゃなく，おもしろいと思うことを表現して，それを認めてもらいたいのに，情報を伝えるリポーターをやっている場合ちゃうと。ちゃんとネタも考えられて，面白いことができる子だと思われたいという気持ちが強くなって，大阪の養成学校に行きました。毎日新ネタを考えては先生，生徒の前で披露して，とにかくネタを作る訓練の1年間でした。

── そのときも現在のような1人のスタイルだったんですか。

そうです。中間発表会のときにすでに有名な芸人さんや吉本のスタッフさんが見に来ていて，あ，この子面白いかもと思ってもらえて，私の心の師匠であるバッファロー吾郎さんとかがやっているラジオに初めて出たところ，面白いと言ってもらえたんです。そこから結構とんとんとんと，お仕事が入るようになりました。

── 芸人の道に進まれることに不安はなかったんですか。

なかったですね。幼いころからテレビで見ていたサブロー・シローさん，バッファロー吾郎さん，中川家さんとかに出会えれば自分のデビューも早いだろうな，と思っていて。実際にお会いしたらほんま思っていた

通りの感じのリアクションだったので，やっぱり私の分析は当たっていたと（笑）。そういうところはちょっと目がありましたね。

――『エンタの神様』でもたくさんのファンができたのでは。

全国ネットでお笑いが好きな全世代の人に知ってもらったのは，そこかもしれないですね。それまでは大阪の深夜番組への出演や，NHK演芸大賞とか色々な演芸大会での受賞で，知ってくれてた人は多かったんです。けど，一般に養成学校卒業後はオーディションを受けてタレントプロデュース組というのに上がることが多いんですけど，私はまったく上がれなくて。審査員の女子高生にうけなかったから（笑）。目の前のお客さんを笑かすのが一番大事なことですし，お客さんにネタを合わせろと周りからも言われたんですけど，合わせてしまうと自分のネタじゃなくなる，そこのこだわりはずっと持っていて。ここのお客さんじゃない，ここのお客さんとはたまたまセンスというか，お互いが合わなかったかもしれないけど，別のお客さんとは絶対に合うはずや，と思っていました。あるとき，バッファロー吾郎さんのお客さんの前でネタをさせてもらったとき，同じネタですごく受けたんです。そうそう，これこれ，と（笑）。そういう30～40代ぐらいの大人に笑ってもらいたい，将来こういうお客さんを自分で集めるようになりたいなと思っていました。

―― 代表的キャラクターの水谷千重子さんや西尾一男さんはどのように誕生したのですか。

西尾一男はもう15年以上前からやっていて。うちの父親もあんな感じだし，あとよく行く焼肉屋の大将の「段取りします」という口癖とか，息継ぎなしでばーっとしゃべるところとかを真似したりして。基本おっさんが好きなんです，私（笑）。おっちゃんとしゃべっているとほっとするというか楽しい。ロケもずっとおっちゃんとしたいなと思うぐらいで，いっそのこともう自分がおっちゃんになってしまおうと。

水谷千重子は演歌の人がポップス歌うときのこぶしがすごく面白いなと思っていて，いきなり最初から芸能生活40周年みたいな感じで出てみたら，お客さんも今まで40年応援してきましたよみたいな顔で座ってくれているわけですよ。これはみんなでコントができる集団コントだ！な，もっと大きくしようとなったんです。

水谷千重子と西尾は好きなので，ずっとやっていますけど，１つのキャラを同じ人気で持続させるのがどれほど大変か感じます。水谷千重子は7年目で，2019年は明治座の初座長公演までやらせてもらえたので，我ながら自分でも頑張ったなと思います。やっぱり飽きられたら終わりだし，常に新鮮な気持ちでライブを大事にしていかなくちゃだめだなと思っているので，歌は真剣に歌うし，トークでも楽しませたいから，サービス精神は忘れずにやっていきたいなと思っています。そして常に展開を考えています。友近ちゃんのことはあんまり知らんけど，水谷さんのファンです，というおばちゃんとかもいたりして，見ていたら何か楽しい，幸せな気分になれるわ，という声はよく聞きます。80代，90代のおばあちゃんたちが杖を突いて，田舎のコンサートとかに来るのを見ると感動しますもんね。

―― 本当に歌がお上手で感動するのですが，練習されるのですか。

正直，歌はあまり練習しないんです（笑）。もちろんうまく歌う心掛けはして，のどを壊さないように気を配る。あとはコンサートが47都道府県回っているので，場数を踏むとすごく声が出るようになっていますね。でもレッスンとか1回も受けたことないですし，声の出し方も自己流。だめなんですよ私，人から何かを習うというのが向いてなくて，自己流で全部やりたいタイプ。ダンスなんかも創作は得意だけどちゃんとしたダンスはできないし。器用な部分と不器用な部分が分かれています。

―― 最近ご自身のキャラクターグッズもたくさん出されていますよね。

これまでは吉本所属だったので自分でグッズプロデュースはできなかったんですけど，エージェント契約になってから，グッズ専門の方と直接こんなのがいいですね，とやりとりをして，お客さんも気に入ってくれるグッズができてきてます。商品開発とか好きなんです。そして色々な会議に出るのが好きなんですよ。一から先方さんとしゃべって，何かクリエイティブなことをするのが好き。だからエージェントになったんですけどね。

―― 全部ご自分で話し合われるんですか。

もちろんします。誰かにお任せはしたことないです，今までの人生。ちゃんと話し合って，お互いが納得してやっていくというのが好きなので。

── かなりお忙しいですよね !?

でもそうしないと，あれやってくれたかな，大丈夫かな，あれは言ってくれたかなという方が気になって。だったら，その苦労よりは自分が出向いて行って，日本全国飛び回って交渉する方が好きです。

── エージェントになって仕事のしやすさなどは変わりましたか。

やっぱり局の人はタレントと直での話はやりづらいところもあるからか，面白い物を作ろうとするときも，何人か間に入っちゃうんですよ。そうすると伝わるのに時間も掛かるし，ニュアンスも変わってくる。そういうことじゃなかったんだけどな，と思ったりすることがあったんですが，それが解消されたというのが一番大きいですね。1から参加したいタイプなので，自分で仕事を取りに行ける，営業できる，という契約は自分に向いているなと思ってます。

── 営業までされるんですか !?

やります，やります，むちゃくちゃやります。実際にこうこうこうでねと企画の説明もしに行ったり。例えば，年末に西尾一男が，色々な場所でイルミネーションの点灯式に行ってボタンを押したら面白いやろうなと思っていて。このコロナ禍でなかなかイベントは開催できない。密を避けなければつまらない現状だったらYouTubeでイルミネーション配信すればみんな喜ぶんじゃないかなと。イルミネーションと西尾一男というマッチしないところとか，おっさんが日本中の光を灯しに行くという企画が面白いなと。それでまず行政に連絡しようとか，観光庁かなとか進めています。「YouTube」で配信することによって，その施設の宣伝にも町おこしにもなるし，市町村や施設の人も喜んで話をしてくれます。

── 友近さんから直接お話があると驚かれませんか !?

驚きます，みんな。え，本人が来るんですかみたいな。でも実現のスピードが速くなりますよね。愛媛の観光大使もやっているのですが，直接PR，営業ができるなと，この前も県庁に行ったり，市役所に行ったり。まだ全国の人が知らない愛媛の良さを，友近セレクションで，東京でもアンテナショップとか物産展みたいなものを企画しようみたいな話も進んだりとか。この仕事の仕方が私に向いているので，今すごく楽しいです。

── デメリットはないんですか。

それはあるにはあるんですが，なかなか言えないところが（笑）。

── わかりました（笑）。ちなみに契約変更にあたって弁護士に相談されたんですか。

弁護士同士のやりとりとかがあって，そういうところはアドバイスをもらったりはしていました。

── 弁護士についてはどんなイメージをお持ちですか。

本当に頭がよくないとできないだろうなと。どうやったらそういう脳になるのか，ただただ尊敬ですね。あとはイコールお金が発生する人たちと思っちゃうので，何か相談したいけどやめておこうと思うことはあります。これはお金いらないから，とか言ってくれる人がいたらいいですよね（笑）。そういうことも考えると，弁護士という立場じゃないときに出会いたかったなと思う人たちなので，学生時代の同級生が弁護士になっていたら一番いいなと思います（笑）。

── 本当にお忙しそうですが，ただぼーっとしている時間などはあるのでしょうか。

ないかもしれないですね（笑）。常に何か考えてます，あれしなあかん，あれもそうや，と頭の中24時間ずっとです。でも仕事の疲れって本当にないんですよ。

── 時間の使い方の工夫は。

ちょっとした時間でも，たとえば夕方仕事が終わったらすぐに新幹線に乗って，熱海に行って，1泊して次の朝帰ってくるとかします。家でゆっくりした方がいいわという人が多いかもしれないですけど，何か新たな自分が発見できるかもよと言いたいです。旅館に行って，料理を1人で食べる，お風呂に入る，景色を見るだけでも，今までやってきたことない人が，ちょっと大人になったかもと思えるかもしれないし，新たな発見が1つ2つはあるんじゃないかなと思うんです。

── 物事の優先付けはどのようにされているのでしょうか。

第一に仕事です。テレビのバラエティーももちろん出たいし，地方の愛媛の仕事もしたい。ライブ活動もしたい。したい欲求が多いので。

── 2020年はコロナの問題もあり，お仕事に変化はありましたか。

テレビの仕事はリモート中継でできていたのでそこまで変わらなかったけど，ロケでの仕事はほとんどなくなりましたし，土日全部に地方で水谷千重子のライブを入れていたので，それが全部なくなったのもすごく大きかったし残念でしたね。その分，土日は休みになりました。サラリーマン，OLさんという感じ。

── プライベートでの変化は。

昔から1人旅は好きで，「じゃらん」の会員なので，あ，ここ今度泊まりに行こうとか，本当に毎日見ていました（笑）。GoToキャンペーンについていろいろ変更したタイミングも全部知ってましたし。行くときは，みんなで行くのも楽しいですが，基本1人旅ですね，みんなのスケジュールを合わせていると実現しないので。やっぱり実現に向けて動かなきゃだめなの，すべて。夕方ぐらいに旅館に行ってお風呂に入って翌朝帰るんですけど，その時間だけでも温泉に行きたい。温泉と列車の旅が好きなんです。

── ほかにストレス発散法は。

人としゃべる。ご飯に行って，こういうことがあったとか，私もそう思うわみたいな，話をしあって。あとは仕事で発散するタイプなので，仕事は絶対に続けないとだめなんですよね。楽しい仕事をして，うわ，楽しい，アドレナリンが出ているわ，やっぱりこの仕事，辞められないと思います。

── 辞めたいと思ったことはないですか。

ないです。大変と思ったこともないですよ，本当に向いてるんだと思います。これ以外の仕事ってできないかもしれないですね。芸人を辞めたらどんなかなと考えたんですけど，どこかで「YouTube」とかの配信はすると思う。キャンピングカーとか，車で365日移動して，今日は長野，明日は北海道，次は九州に行って，今こんなのをしていますみたいな配信をする。5年ぐらいたって，ぱっとおもろいと思うことをやって，またぱっと消えるとかも面白いなと。職業は「芸人」というか分からないですけど，面白いと思うものは出していきたいとは思います。たぶん辞めることはないと思うんですけど（笑）。

── お仕事について悩んだり相談されることは。

姉とか作家さんとか，本当にお笑いのこと，自分のことを分かってくれている人に相談したりはあります。芸人同士でこのネタどう思うとか，番組でこう言われたけどどうするみたいな話をする人も何人かいます。でも面白い，面白くないの判断は自分で決めますね。今一緒にユニットコントをやらせてもらっている，バッファロー吾郎Aさん，ロバートの秋山さん，ハリセンボンの春菜ちゃん，渡辺直美ちゃん，ずんの飯尾さんとか，みんなすごくしっかりしているし，自分はこうあるべきだとか，こうしていきたいとか，この世界ですごくちゃんと地位を築いているので，そういう人はしゃべっていても刺激になるし，お互い相乗効果があります。

── 女性が少ない業界かと思いますが，困ることはありませんか。

ないですね。むしろ女芸人は人数が少ないしすごく得だろうなと。そこはちょっと男女差別あるんですけど，男の方が絶対おもろいので確実に。やっぱりお笑い脳が違う。もちろんそういう男脳を持っている女芸人というのが増えてきているとは思います。女芸人は一風変わったことをするとドンと行くじゃないですか。その注目度は男芸人よりも何倍もあるので，そういう点ではすごくチャンスが多いと思います。ただ男女で考えたことは全くなくて，男女関係なく同じ価値観でおもろいものが作れる人でありたいし，そういう世の中，業種がいいなと思います。男とか女だからじゃなくて，自分が面白いもので勝負したいなと。

── 我々も女性の方が少ない業界ですので，「自分」として何をできるかを大事にするという考え方はぜひ女性弁護士にも伝えていきたいです。本日はありがとうございました。

プロフィール　ともちか

1973年愛媛県生まれ。多様なキャラクターに扮する「憑依芸」で幅広い世代から支持される。歌手としても女優としても評価が高いエンターテイナー。2020年からは吉本興業と専属エージェント契約を結び，新たな仕事スタイルを築きながら更なる活躍を見せている。